

同志社と社会福祉

過去・現在・未来

司会

井岡

勉

(同志社大学文学部教授)

山下

勝弘

(社会福祉法人牧人会理事長)

豊田

慶治

(華頂短期大学名誉教授)

室田

保夫

(高野山大学文学部教授)

〈発言順・敬称略〉

井岡 社会福祉に飛び込んでいった同志社人たちの今日に至る軌跡、考え方と、これからの同志社の社会福祉にかかわる人々への課題というお話を進めていただきたいと思います。最初に簡単な自己紹介として、いつ同志社に学ばれ、現場なり研究なりをどう積んでこられたかをお話してください。

山下 僕は一九六〇年、大学院神学研究科修士課程を修了しました。安保の年で卒業して東京の東京山手教会に赴任しました。二年後に移ったのが大森めぐみ教会です。同志社とは関係が深い岩村清四郎牧師が創立された教会でした。移りました理由の中に、大学での専攻がキリスト教教育で、キリスト教教育によ

る宣教を考えていたものだから、主任牧師であられた岩村信二先生は日本でもキリスト教教育の理論的にも実践的にも第一人者であり、そこで学びたいという願いもありました。

時代が時代で、万博問題や日本キリスト教団内の造反など、教団として社会的関心が高まっていく中で、僕が関係しておりました教会の青年たちも、教会全体が否応なしに社会的関心を持たざるをえなかった。当時の社会的関心は政治的関心となっていたわけですが、たまたま大森めぐみ教会の場合は、社会的関心が単に政治的、イデオロギー的な闘争ではなくて、実践的な社会参加を考えていく方向が育っていました。その一つの契機は、

僕などがリーダーで実際に活動した奉仕活動がありました。その活動にまいりましたところが群馬県の知的障害者の施設でした。これが僕たちのこれまで知らなかった隣人との出会いともなって、そこから社会福祉への関心を持つようになります。

何回か継続してボランティア活動をしているうちに、隣人としての役割は何か。同じ神によって創造された人間であることを認め合うならば何をなすべきか。その答えは非常に単純で、それは共に生活をするのであると理解して、施設の整備、建設を決意しました。当時は、個人的な関心というよりは、教会の働きの拡大として社会的責任を持つと、教会とい

う組織全体が障害のある人たちとの共存をめざそうではないかという意識でスタートした。実際の活動の開始は一九六九年一二月で、福島県白河市の郊外にクリスチャンの方で建設用地を無償提供してくださる方がおられて、僕たちもこれを信仰を持って受け止めようということになりました。当時の学生、大森めぐみ教会で働いていた教員が現地に行つて建設準備を開始しました。最初の施設の開設は一九七二年。今年度が事業開始二十五周年、法人認可を受けて設立二十六周年です。

豊田 大阪外国語学校（現大学）の二回生に在学しておりました昭和十七年に兵役につきまして、鄭州で終戦を迎え、二十一年に日本に帰つてまいりました。しかし行くところがない。母親と姉は満州に残っていました。唯一頼るところは同志社に来ていた弟だけです。弟が、もう一回勉強せよということ、竹中勝男先生のお宅に連れていつてくれた。二十一年四月に入学。同志社キャンパスはほとんど、元軍人、兵隊ばかりでした。野戦で軍事貯金がありましたから、二年くら

いはやっていけると思つた時、モラトリアムが来たんです。持ち金では半年持たない。自活していかないといけない。京都市の中央市場で荷車を引いた。今でいう宅急便です。市内の小売店の人が買った魚、野菜、果物を店まで運ぶ、大八車で。そういう仕事を学生同盟厚生部という名前で私たちは始めたんです。

卒業しましたら、竹中勝男先生と住谷悦治先生が社会福祉研究所をお作りになった、千本丸太町の社会事業協会の二階に。手伝いに来いと言われて、大塚達雄君とか小倉襄二君とかと一緒に社会福祉研究所で勉強しました。三つくらい調査をやりました。結核調査と収容施設児童、養護施設、当時は孤児院の調査。一番大きな調査は街娼の調査をやりました。MPが街娼を市内でキャッチしてきて、病気があるかないか調べる。平安病院、今の洛東病院に送つて検査して、もし病氣を持つていたら自費で治療しなければならぬ。入院期間をねらつて竹中先生、住谷先生、大塚君、小倉君、私などがインタビューに行つて聞き出す。その結果、一冊の本になりました。『街娼―その実態

と手記』を昭和二十五年に出したと思います。昭和二十五年に初めて新制大学院ができ、社会福祉学専攻修士課程が作られた。竹中先生のお勧めもあつて進学しました。第一回の入学者は六名。大学院修了は一九五二年で、卒論のテーマは「コミュニティ・オーガニゼーションの基本原理」でした。

大学院修了後、京都市役所からお呼びがかかつて、ケースワーカーにならんかと。大塚達雄君や澤田健次郎君らといっしょにやりました。そしてその後、福利課長や市民相談室長を経て、昭和五十一年に五十五歳で定年退職しました。その直後に華頂短期大学から来て欲しいと言われて「社会問題」を担当。七十歳で名誉教授の称号をもらつて、授業は現役のときそのまま続けています。

室田 私だけが戦後生まれの団塊の世代で、一九四八年生まれです。同志社に入学したのが六八年。ちょうど、全共闘運動真つ最中でした。在学中の多くをバリエードと共に過ごしまして、大学で勉強した記憶はあまりありません。あの頃は自主講座とか好きなことをやっていたわ



山下勝弘氏

やました かつひろ／1935年神戸市生まれ。同志社大学大学院神学研究科修士課程修了。日本基督教団大森めぐみ教会副牧師（現職）で、1971年に社会福祉法人救人会を設立し、理事長に就任。現在、福島県・山形県に知的障害関係10施設を設置運営。著書に『精神薄弱者性教育ガイドブック』（大揚社）、『シーヴス法の理論と実際』（瑞穂社）、『超高齢社会とキリスト教会』（キリスト新聞社）などがある。

けです。思い出は住谷悦治先生の「社会科学論」とかです。大学院に入ったのは七二年です。山下さんは六〇年安保とおっしゃいましたが、僕は七〇年安保の頃です。万博の時代で、日本が豊かになる中でいろんな矛盾が出てきた。スチューデントパワーとか。そういう時代に同志社で過ごしました。

大学院の頃より、人文研で留岡幸助の研究会にかかわり、卒業後も著作集の編集の仕事をやっていました。その後人文研で、山室軍平の研究が三十代、四十代が石井十次の研究。歴史の研究が面白くなって、ずっとやり続けてきたわけです。七九年から真言宗の高野山大学に行き、外から同志社を見ているということですね。

井岡 私は一九五七年、社会福祉学専攻に入学して、六一年に卒業しました。日本が経済成長に向かう時期で、しかしまだ貧しかった時期です。六〇年安保がありました。貧しかったですから学生時代から仕事をしていました。豊田先生の後輩ですが、京都府社会福祉協議会に三年生の頃から行っておりました。仕事をしながら、六三年、大学院に進み、六七年に出ました。その後、華頂短期大学で三年務め、七一年同志社に入って今日に至っているわけです。

新島の悲願と社会事業

今日は「同志社と社会福祉の過去・現在・未来」ということで話を進めさせて

いただきます。同志社と社会福祉は密接不可分の関係にあると思います。日本の近代化以降、社会福祉の形成と展開に同志社人が果たした役割は極めて大きく、今日まで長い伝統と実績を有しています。社会福祉は同志社の特色の一つであり、アイデンティティの一つであると考えます。その同志社と社会福祉の原点は新島襄先生の大学の設立と目的、「一国の良心とも言うべき人々を養成せんと欲す」という悲願、「日本の蒼生のために一死を惜しむな」という厳しい教えにあるわけです。同志社に学んで、新島の祈りを胸に刻んだ多くの先輩たちは平民主義、民衆の立場に立って、小倉先生の言葉ですが、「底辺に向かう志」を持って、貧しい人々、差別に苦しむ人々、人

権を抑圧されている人々と共に、その苦難を取り除いて自立を支えていく福祉実践を開拓し推進していったということでもあります。

しかしながら、こういう輝かしい伝統、実績の半面で、いろんな限界とか誤り、妥協、屈伏などもあったわけですし、一国の良心というのは必ずしもストレートに貫かれたわけではない。これまでの同志社と社会福祉のプラスの面だけでなく、負の遺産についても直視をして、教訓を学びとって、現在と未来に生かしていく必要があるのではないかと考えるわけです。

そこで、戦前の同志社と社会福祉についての話から始めたいわけですが、同志社の社会福祉の原点というのは、新島襄の悲願、彼を支えた人たちが、同志社の創設の頃に立ち返って見る必要があると思います。その頃、新島襄がどういう思いで一国の良心を育てようとしたのか。彼を支えた山本覚馬とか宣教師の群像としてラーネットやデイヴィスが同志社教育に助力されたわけです。また、ベリーなども新島を支えて同志社病院、京都看病

婦学校を作られた。そういう人々に關して、室田先生が『キリスト教社会福祉思想史の研究』という立派な書物を書いておられます。室田先生、その序章のところをご紹介ください。

室田 私の大学時代は全共闘時代と言いましたが、その頃、新島精神は口幅つたい感じでした。私は、留岡研究を通して、同志社の新島襄、その原点はどのへんにあるのかという関心から研究に入ったのですが、六八年当時は一番大きな課題は日本の近代化は何だろうかということでした。政治闘争があり文化闘争があつて、近代化が問われていました。よく言われているように、慶應の理財、経済。早稲田の政治、在野精神。同志社は社会問題、宗教、社会主義。同志社の社会福祉は建学の精神がはっきりしています。私学のよって立つべきものなんです。新島が山本覚馬やデイヴィスなどの協力で同志社を創った意味、井岡先生がおっしゃる良心教育であるのとまとめてみるわけです。

大きく時代を区分していくと、一九三一（昭和六）年、社会事業学専攻ができ

るまで。キリスト教なり神学からいろんな人たちが出てきた時代。もう一つは、戦後の社会学科までの時期。そしてそれ以降続いていく時代。三つぐらいの区分ができると思います。同志社の創設期、黎明期という時期には独特の雰囲気があつたと思います。徳富蘆花の『黒い眼と茶色の目』に出てくるわけですが。

新島は福沢とか大隈のようなスケールの大きな思想家ではないと思つていますが、その人の個性を発見し、その人を生かしたことが新島の特徴だと思つます。新島の生き様を見た中で、同時代の社会

事業家である留岡なり山室なり、社会事業の二大巨人が出た。当時の学生は新島を一つの教育者ととらえたり、慈善家ととらえたり、さまざまな形でとらえているわけです。柏木義円が言っていますが、福沢が日本の経済、物質的な近代化をやつた。それに対して新島は精神的な近代化をやつた人物である。その中で立身出世というと語弊がある言葉かもしれないが、そういう人物でなく良心教育とか地の塩という人々を作り上げていこうとする、その姿勢が大きく影響を及ぼし

ていったのではないかと思います。具体的には、その頃に、同志社病院の設立や看病婦学校が新島の生前中にできていますが、病人を看護していく。キリスト教という精神的な救済ではなくて、病んでいる、苦しんでいる人たちを救済しているという現世的、世俗的な。そこにキリスト教主義として新島がやっていたことが生きていると思います。

もう一つ、ラーネッドとペリーという宣教師の役割は大きいと思います。社会問題についてはラーネッドから影響を受けています。留岡流に言うなら「右手にバイブル、左手に経済学」。ペリーは日本の社会福祉の歴史からもっと評価されている人物だと思いますね。監獄改良だけでなく、衛生関係の問題でも彼は大きな役割を果たしております。とりわけ監獄改良での彼の役割は大きいと思います。

新島と留岡、山室たちが活躍していく中で、各界とのパイプ役を果たした徳富蘇峰とか安部磯雄がいた。初期の頃は、同志社は精神的に自由があった。それぞれの良心に従って生きている中で、それぞれがお互いを生かす道を考えていたよ

うな気がします。

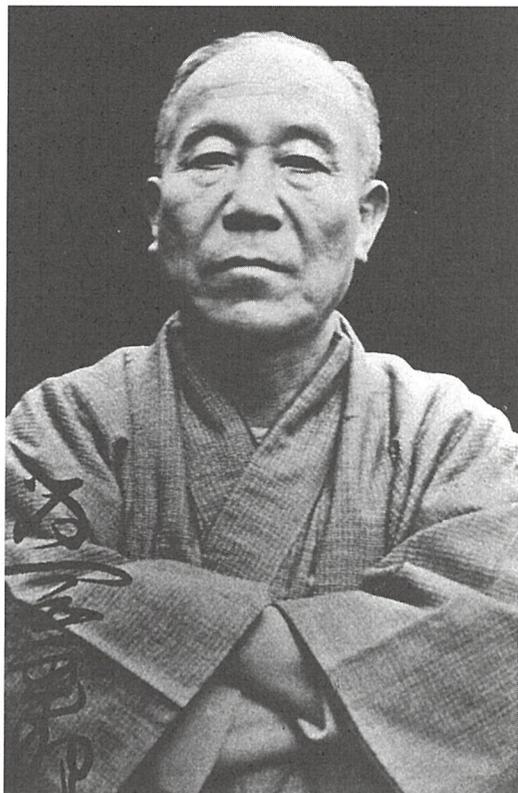
井岡 初期の新島の精神に触れて、社会的実践に進んでいった人たちが出てくる。特に、当時日本の二大暗黒と呼ばれた監獄と遊廓の問題に立ち向かっていった留岡幸助と山室軍平を中心に特徴的な事跡を紹介していただきたい。

室田 二大暗黒というのは誰が言い出したのかわからないのですが、留岡の回顧の中にある。留岡が学んでいた頃は明治二十年前後ですが、まだ労働者の問題なり貧困の問題、近代的な社会問題は登場してこなかったと思う。前近代的な矛盾を持っていたのが監獄であり、かつ前近代的な公娼制度を引きずった女性たちの問題であったと思います。その二つの暗黒に適合する形で、監獄改良における留岡、救世軍における山室と言われた。

具体的なことを言いますと当時、監獄改良事業は大きな意味を持っております。キーパーソンとなっていたのは、原胤昭であり、大井上輝前という典獄です。サンフランシスコなどで学んできた開明的な人ですが、そういう人たちが監獄改良事業に着手するという前史があ

る。さらにその前史ですが、ペリーが明治九年に全国の監獄を視察して、ジョン・ハワードの『監獄事情』にも匹敵することをやって、内務卿の大久保利通に提出したわけです。ペリーの監獄改良に対する考え方は、その頃の行刑界における一つの教科書的なもので、その考え方が原胤昭に継承され北海道に渡っていった。新島の亡くなった後、小崎が同志社の社長になります。その時に原と大井上、キーパーソンになって、小崎を通して、同志社の卒業生で監獄改良に関心があるということ、留岡が北海道と呼ばれていく。留岡と呼ばれたことでさらにその後、阿倍政恒、大塚素、松尾音次郎、山本徳尚、水崎基一、牧野虎二ら同志社から十人くらい行きます。北海道バンドと呼ばれるわけです。そういう大きな仕事を明治二十年代にやっていった。北海道バンドの多くは監獄改良だけではなく社会事業にも就いていく。日本の社会事業の原点の一つがそこで形成されたと思う。

もう一つは救世軍の問題です。明治二十八年、救世軍が来て、その後山室軍平が中心になって活躍していく。民間の社



留岡幸助

会事業のあらゆる形態、セツルメントから更生保護事業、婦人保護事業、医療事業等を救世軍がやっていった。この二人の大きな山脈は同志社にとって重要な意味を持っていると思います。

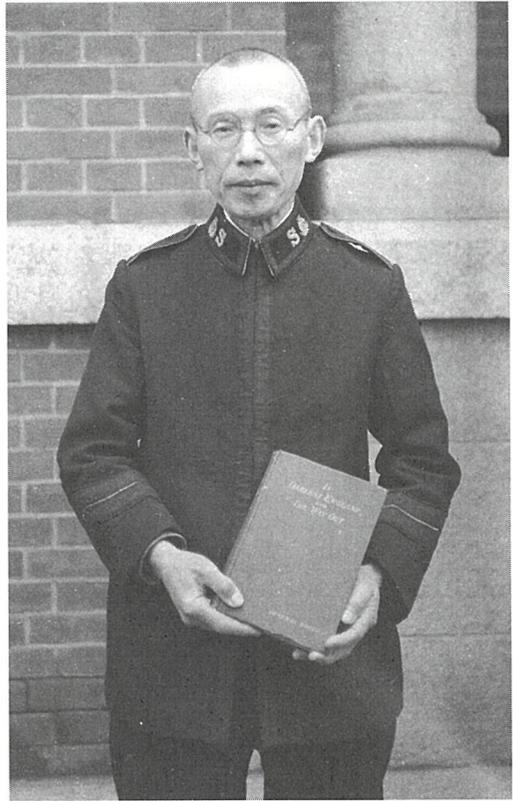
それに続く人々が、その山脈を形成していく。そして労働者の問題、貧困の問題など、また違った社会問題に対応した。最初は、留岡にしる神学部出身で、社会事業家ではないから、同志社のキリス

ト教であり、組合教会の問題にかかわってくる。たとえば、社会に対して日基における植村正久との比較はどうか、功罪はあるかもしれませんが、教会が社会にどう対応するかというのは明治時代から個人の生き方の問題としてあったと思います。それが新島精神によって、地の塩となり、隣人となり、良心と自由な発想の中でやっていったということですね。それが一つの原点ではないだろうか

と思います。

井岡 その後、関連して監獄改良事業から少年感化事業に展開していく。

室田 留岡個人の場合は、北海道での監獄改良の経験から、犯罪の問題、犯罪をどう見るか、治安的発想などの面は課題を残していますが、感化事業についてパイオニア的なものを留岡はやっていったと思います。アメリカに渡って、プロツクウェーという有名な典獄に会ったりして、日本に移植していった。家庭学校も一八九九年に作る。その事業は現在まで続いていますし、留岡が家庭学校を作ってやっていった意味は現代の大きな遺産としてあると思いますね。十九世紀の終わり、世紀末で百年ほど前の話ですが、慈善事業の中で大きな人が出たということ、感化事業だけでなく、後に内務省にも入っていきますから、内務行政にも影響を与えていく。社会福祉の歴史では、井上友一とか小河滋次郎とか窪田静太郎といった内務官僚が大きな役割を果たしています。しかし、もう一つの民間の社会事業家として留岡なり山室なり、西村清雄とか大塚素とか、明治三十年代の中



山室軍平

でやっていった彼らの業績は、官僚が社会行政としてやっていった以上の役割を果たしたと思います。それは行政を推進するものであるし、行政を越えるものではないかと考えています。そこには現代につながり、くみ取っていけるものがあると思います。

建学の理念が生み出した キリスト教社会事業

井岡 今のお話の中で、同志社のキリス

ト教の社会的実践という華々しい取り組みがあるわけですが、どういふふう評価されますか？

山下 僕は社会福祉史の専門ではありませんので経験的に話します。おそらく、留岡の監獄改善とか山室の廃娼運動とか、彼らが自分の持っていたキリスト教信仰と直面した現実との間で、自分自身の課題としてストレートに受け止めた結果として起こってきた成果であると思います。最初から、必ずしも監獄の改良を

しようと思図して社会事業を考えただけではないだろうし、廃娼運動の問題にしても、山室にとっては自分の信仰を持って社会に直面した時に、必然性を持って迫ってきた課題であって、自分が意図的に引き出したものではないと思っています。

僕の場合も振り返ってみると、僕の場合は現代史ですが、神学部の学生時代の頃、大学院時代を含めて、当時の学長は大下角一先生です。あの方は牧師至上主義です。卒業生は全部牧師になれと。教職課程をとると、「何ごとであるか。お前たちは牧師になるために神学部に来ているのであって、教職課程をとるとはけしからん」とさんざん言われたくらいです。僕の場合も、決して社会福祉の領域に参加するとは予想もしていない。キリスト教の教育的な関心、キリスト教と社会との接点を教育的手法によって関係づけようと思っていましたが、それを社会福祉だと思っていない。たまたま教会活動の中で知的障害者と出会った。明治時代の人々と僕との差を強いて言うところ、彼らは個人としての一つのモチベーション、僕



豊田慶治氏

とよだ けいじ/1921年中国大連生まれ。'52年同志社大学大学院文学研究科社会福祉学専攻修士課程修了後、京都市ケース・ワーカー、福利課長、市民相談室長歴任。'76年華頂短期大学教授。'91年名誉教授。専攻は「部落問題」。部落問題研究所監事、京都身体障害者福祉センター理事長。著書に『同和行政の理論と実践』（部落研）、「社会福祉への接近」（ミネルヴァ書房）、「差別からの飛翔」（新日本法規出版）、「証言 京都市の同和行政」（部落研）などがある。

の場合は教会という組織の中からのモチベーションです。僕の場合は教会という組織の信仰的な行動として、社会的責任の取り方として知的障害者の問題に参入した。

大胆な言い方ですが、同志社に学んでいたからと言って、僕自身が留岡とか山室という人間と何らかの連続性があるかと言え、ない、残念ながら。この人たちに直接学んだのではなく、同志社で学んだのは、キリスト教そのもの、信仰そのものであった。しかしそれをもって時代という、社会という現実には直面した時に、結果としての行動は社会領域に参加する形で展開していった。明治時代の人たちの場合は、時代が社会的な条件が未組織であった。そこで個人の資質がすべ

てのものをリードし、構築し、近代の社会福祉活動形成、思想、理念を含めての思想形成に先駆的な役割を取られたのではないかという思いがいたします。

その背後にある同志社が、もしキリスト教社会福祉事業の先駆的活動の役割を担ったとするならば、この学校が持っていたキリスト教信仰を基盤にした教育活動が重要な要素になってくるのではないかと思います。僕が知的障害者の福祉の領域に参加した時も教会の組織としては社会的参加です。しかし個人的に言えば、この人たちも福音の対象であるならば、キリスト教教育的活動の対象として選ばれており、僕自身も、それに仕えなければいけないという気持ちから知的障害者福祉の領域に参加していきました。

山室にしても、明治時代の人たちは、そういう意識があったのではないか、それが現実ではないかと思えます。当時の教会がどのような形で彼らの運動を支えていったのか非常に興味と関心があります。教会規則の中で、カルヴァンのジュネーブ教会規則というのがあります。宗教改革の教会規則の中には、社会福祉が教会活動として明記されている。貧者の救済とか医療施設を設置するとか。ところが明治時代の組合教会では、残念ながら初期の段階では、「何々君がこの仕事を始めたので我々も協力をする」という形です。石井十次と岡山教会の場合もそうです。そういうところを考えると、同志社が育てたキリスト教社会事業は、基本にある建学の理念が重要な要素を果たし



室田保夫氏

むろた やすお／1948年京都府生
まれ。'76年同志社大学大学院文学
研究科社会福祉学専攻修士課程修
了。'96年同志社大学より博士の学
位を受ける。専門は近代日本社会
福祉の歴史。'79年高野山大学文学
部社会学科講師、以降助教授を経
て、現在同教授。この間人文科学
研究所で留岡幸助、山室軍平、石
井十次らの研究に従事する。主著
として『キリスト教社会福祉思想
史の研究』（不二出版）、共編著と
して『留岡幸助著作集』全5巻（同
朋舎出版）等がある。

たと思います。

室田 おっしゃる通り、建学の理念があ
ると思います。その時、留岡の場合は単
純なんですよ。同志社時代にハワード
の生き方の影響を受けて北海道に行っ
て、「光は暗きを照らす」というのが一つ
のモチーフになっていた。「キリスト教
新聞」という組合教会の機関紙を見ま
すと、留岡の編集の時期に特徴がみられま
す。社会的な問題が出てくる。それにつ
いて福音主義の立場から植村が批判する
わけです。

二十世紀の都市伝道の中に入ってくる
と、例えば八浜徳三郎が神戸の教会に行
った時に、逆に社会事業をやることで教
会から首になるわけです。教会側が社会
事業をサポートするのではなく、まず個

人の問題として出てきたと思いますね。
自分のキリスト教主義であり、良心であ
り、信念でやっていったと思われま
す。結論かもしれませんが。

山下 教会が教会規則などで社会福祉を
位置づけなかったことの意味は大いにあ
る。それは教会から自由であったという
ことだと思います。教会が持っている教
義、ドグマに社会福祉やサービスが拘束
されていると、果たして山室とか留岡が
すすめたような形態での明治初期の自由
な社会事業活動が考えられたらどうか。

むしろブレーキをかけたのではないかと
いう思いもあります。教会の全体の姿勢
として社会福祉そのものが教会の本質的
な業務、活動として玉虫色の認知をして
いたということの方が意味があると。そ

うでないと、明治時代の同志社の先達た
ちが作り上げた近代の社会福祉活動は展
開されることはなかったのではないかと
いうのが僕の今の思いです。

井岡 自由ということが一つ、キールワ
ードですね。

室田 大正期になって、社会事業が変わ
ってきますね。慈善事業から社会事業と
いう言葉が出てきて、明治末期から大き
い転換期にあると思うんですが、組織化
されていく。そうなってくると、宗教界
の方でも見過ごすことができなくなる。

仏教の方で、全国の社会事業大会が明治
末期にあるわけです。大正中期になると、
各教派の中で社会部を設けて、組織的に
やっていこうという動きが出てきます。
そこまでの間は、とび抜けた巨人の時代、

そして個人から次第に組織化されていく中で、逆に最初の優れたみずみずしい精神が失われていく。

山下 今日、社会福祉が主問題で、これに関連した教会の問題はメーンの問題ではないと思いますが、同志社に関係する旧組合教会が社会的な関心を持つてくるのは事実です。それがより近代化した大正期、昭和初期にかけて日本の現代化の中で教会もそれと同じようなテンポで変質していった。そうすると、初期のスピリットとか思想性も喪失されるだろうし、思想性を支えていた情熱も消えていく。逆に現実の中で、大正期から昭和にかけて日本の社会構造のなかで社会事業を考えた場合に、かつてのような自由な社会福祉活動の展開は許容されない時代的背景が出現してきたのではないか。それだけに明治期の社会福祉が我々から見た場合、輝いている。

井岡 大正期に入って活躍した人たちの群像はどうですか。

室田 留岡は大正期に入ってくると、北海道に分校を設けます。連続性から考えると、留岡の意味は薄くなってくるかも

しれませんね。八浜徳三郎とか緒方庸雄らが社会事業の対象が変容していく中で、貧困の問題、スラムの問題などむしろ新しい都市の社会事業に対応していく。救世軍は明治から大正期、時代のニーズに即して都市社会事業を展開していく。同志社出身ですが、松田三弥らが救世軍病院を作ったり、結核の問題をやったりいたします。

豊田 大正は十五年しかないでしょう。明治と昭和にサンドイッチされて特異的な事件は関東大震災と米騒動くらいしかないですね。その間、何か新島先生の精神を継承する社会事業家が出たかなと考えているんだけど、あまりなさそうですね。

室田 八浜のような人はまだパイオニアです。大正元年に大阪職業紹介所を作つて。東の豊原又男と並び西の八浜徳三郎と称されるのは、東西という地域のみを言っているのではなくて、八浜のやり方です。民衆中心主義、古いかもしれないですが、大阪的というか、いわば平民的なやり方ですね。

豊田 米騒動以後、大正デモクラシーが

起きてくる。全国水平社の創立や労農運動の激化など。

室田 自治体に社会課ができてくるわけです。そこでは逆に傑出した人が出にくくなる。

豊田 大阪で隣保事業として公設ではじめての北市民館を天六につくつた。あの頃は官の方がリーダーシップをとつて。

室田 ただ視点を地方に向けると、留岡の次の世代が来ますね。小塩高恒、品川義助、鳥取の尾崎信太郎、島根にいた岡崎喜一郎など、地方の目立たない中で同志社らしい事業を大正時代にやっていた。そのように辺境でユニークな活動になってくる。

社会事業学専攻の設置

豊田 昭和の金融恐慌があつた時、昭和六年に神学部の中に社会事業学専攻ができたのは全国で初めてではないですか。

井岡 一九一八年から二一年にかけてすでに、東洋大学、日本女子大学、龍谷大学等々で社会事業教育を開始しています。同志社の場合、遅いかもしれない。

豊田 仏教の方が先ですか。
井岡 大学令による大学では日本で最初だと聞いていました。

社会事業学専攻設置のところ、事実関係を紹介しておきたいと思えます。一九三一年に文学部神学科に社会事業専攻が設置されて、その時に、社会事業原論の原理を教えたのが海野幸徳先生で龍谷大学から非常勤で来ておられた。竹中勝男先生は演習とか社会学を教えておられた。賀川豊彦先生には年に一回くらい特別講義で教えてもらっていたということです。朝日新聞厚生文化事業団の浜田光男さんも非常勤で。特徴的なことは、翌年三二年、社会事業教育後援会ができています。それから厚生館の前身が四一年に設置されています。実習機関として使ってほしいという大沢徳太郎からの寄付で、学内外の医療機関として設置された。理事長が大沢。大久保利武、生江孝之など錚々たる人々が理事に入っている。館長が牧野虎二。スタッフとして医者が二名、保健婦、看護婦、事務主任等々八名の専任スタッフを置いて。やがて戦後、同志社の直属の経営になっていく。

これはユニークな活動ですね。社会事業学専攻の第一回の卒業生が一九三四（昭和九）年です。そして毎年、五名前後の卒業生が出てくるわけです。社会事業学専攻は四一年、戦時体制になってから神学部から離れて文学部の厚生学専攻になるんです。その時に、中軸の竹中勝男・竹内愛二教授に加え、大林宗嗣教授を招く。嶋田啓一郎先生が助手として就任される。当時、国策としての厚生事業ということで同志社も国策に乗っていった方が学生も集まるし、それでなくても同志社に対する圧迫があったわけですから。そういう中で厚生学は同志社を守り抜く一つの手段でもあったと考えられます。その証拠に四二年、厚生問題研究発表会が厚生学専攻で主催された時に厚生大臣の小泉親彦と、もう一人陸軍大臣が、激励に来ている。四三年には学徒動員こそとて学生が抜けてしまします。その中に中条毅先生もいたわけです。四四年には同志社は法文学部しかない。その中で厚生学専攻は厚生学科になる。ところが、財政的な困難があつて、大林教授が辞表を書かされる。

山下 一九三一年に、文学部神学科の中に社会事業専攻が生まれたのには理由があったのでしょうか。神学科の中に入れる必要があつたのか。あえてそう位置づけたのは、キリスト教主義による社会事業の位置づけを考えたからか、ご存じでしょうか。

室田 資料が残っています。「我が神学科に社会事業専攻を置くは、キリスト教信仰において立つ人物にして同時に社会改良を専門的技術家を養成するためである」という設置理由が。文部省に出す時に書いたと思います。

井岡 キリスト教主義の社会事業実践ということがあつたんですね。

山下 喜ばしいことですね。

豊田 同志社らしい。

編集部 当時、朝鮮からの留学生高風京は昭和三年に女専を卒業して、同志社大文学部に進みますが、社会事業に関心をもって、しばしば賀川豊彦を尋ねて学んでいました。梨花女専教授になってからは、ソウル近郊の農村で住民の無料診療、老人介護のための施設を設立し、自費と募金で運営し、さらに嬰兒館、京城



井岡 勉氏

いおか つとむ／1937年福岡県生まれ。'67年同志社大学大学院文学研究科修士課程修了。京都府社会福祉協議会職員、華頂短期大学講師を経て、'71年同志社大学専任講師、'80年より文学部教授。専門は地域福祉論。著書に『地域福祉 いま問われているもの』（共編著、ミネルヴァ書房）『社会福祉の専門技術』（共著、ミネルヴァ書房）などがある。海外では Ben IOKA と呼称。

姉妹院家庭寮を開設するなど、農村と女性のための社会事業の実践にあたりました。彼女の一年先輩に作家の金末峰がいますが、戦後、高さんが初代婦人局長として、金さんが教会の側から公娼制度廃止に尽力して実現するのですが、期せずして同志社女専卒業生が二人、韓国における売娼の中心人物になっている。まさに昭和初期の同志社の社会事業に対する関心の空気を受けて活動したのではないかと思います。

豊田 ずっと続いているわけですが、山室軍平の歴史がね。

井岡 嶋田先生によりますと、社会事業学専攻は京都府を通じてすんなりと文部省の認可を受けているわけです。それは神学というフィルターを通じてやれば大丈夫だろう。当時は、「社会」という言葉がだんだん抑圧されていく。その中で神学科ならということもあったようです。山下 現実的な配慮もあったとも思われますね。

豊田 同志社にしてみたら必死の時期ですよね。つらい時期を細々と守ってきた先輩は偉いですね。

井岡 その代わり、翼賛体制に、竹中、竹内両教授が研究の立場から推進していくことがありまして。戦後すぐ復員してきた学生たちの排斥運動がありました。竹内先生は関学に移られた。竹中先生は沈黙を守られた。

豊田 皆で押しかけていったが、僕は反対した。僕は竹中先生に恩を仇で返すことはできないから。皆、上級生も含めて、

その時代の竹中先生の大政翼賛的な事跡に対する憤懣もあったかもしれないけど、授業では先生はおつしやらなかった。抗議に行かなかったので覚えているのは、小倉巽二と私。二人は竹中先生擁護だった。

井岡 戦時中における日本の社会事業教育。研究、実践、沈黙、体制協力が行われるわけですが……。戦時下の日本キリスト教がどう対応したのか……。

山下 学校よりキリスト教会自体が、体制協力をしている。たとえば、教会が中心になって戦闘機献納運動をしているのですから。時代的狀況の中でより時代と密着した活動をせざるを得ないのは、教会が現実的な社会事業かということになると社会事業なのです。現実的な社会か

ら距離を置くことができるキリスト教会がすでに協力体制を持っている時に、当時の大学の教師であった竹中先生がその時代の中の必要な社会事業、社会援助、社会福祉的なものを維持するために体制寄りになることはやむを得ないという思いがしますね。現実的に、僕の場合も今の時代もそうなんです。社会福祉構造が組織化され、定着化していった時に、大きな流れの中で流れに逆らうということが困難になる。流れに逆らうことは思想的にはできて現実の行為としてできないのが社会福祉の持っている性格だと思います。社会的制約の中で、よりベターなものを選択せざるを得ないということが、この時代、あっただろうと思います。教会が体制寄りであったという時に、この程度で止まっておられたのは、学問的な立場をしつかりと踏まえておられたからだと思いますね。

室田 僕は竹中先生を全然知らない世代なんです。明治三十一年に長崎で生まれて同志社の神学部を一九二一（大正十一）年に出て、シカゴとロチェスター大学を卒業され、昭和四年から文学部の講師に

就任されてから、三十年助教、三十六

年教授です。竹中先生の理論をきちつと

やらないといけないと思っっていますが、

最初は神学部であり、キリスト教なんです。

昭和初期はマルクスの全盛期であつて、その影響を受けている。戦時厚生事

業になると、ナチスの厚生理論を取り入

れて全体主義的なもので厚生学を確立さ

れた。戦後はまた民主主義の新しい中で

社会福祉研究を作られていった。振幅が

あつて、それが結局、社会福祉そのもの

の持っている性格なり、単に戦争協力とい

う問題だけで片づけられない思想的な

問題だと思っんです。僕など、社会福祉

研究という理論研究の本よりもキリスト

教社会福祉研究、キリスト教社会事業史

という歴史的なものでしか知らなくて、

あの先生はすごいなと思っっていて、先

生におけるマルクスやウェーバーを科学的

にやられた点は評価できるものがあると思

います。さらにそれが政策論として展

開していった場合、一つの外圧的な厚生

事業として、竹中先生が作り上げたとい

うことで済まされないとところがある。転

向の問題とも関係しますが、このへんは

慎重にやっていかないといけない。

豊田 多分に時局便乗型のところはあつ

たと思います。それは同志社の命脈を保

とうとしての先生なりの配慮だったと思

います。戦後、一番社会事業界で勢いを

奮っていたのは進駐軍ですよ。進駐軍の

民生部です。京都の最高責任者はエミリ

ー・パトナムという女性でした。エミリ

ー・パトナムのパトロンの、竹中先生

は。彼女は何かあつたら竹中先生に相談

する。竹中先生もエミリー・パトナムに

相談する。何と言つても進駐軍です。社

会福祉協議会を作つたのもエミリー・パ

トナムのサゼスチョンです。時局に便乗

する点は先生は機敏で、そのへんが純粋

な学生から見れば嫌だったのかもしれない。

僕も真実言つて、後から先生の「社

会福祉研究」を見ても納得できないところ

があるんです、今でも。竹中、孝橋論

争があつた。どつちかと言うと、孝橋先

生に匿かれた。その中間に位置するのは

嶋田啓一郎先生だったと思います。嶋田

先生には心服してゐるんです。竹中先生を

バックアップしてるし、言うことは孝橋

先生に近いことを言われる。竹中先生は

厚生学専攻をつらい時代に耐えて、時局便乗と言われてもキリスト教主義に神学の伝統を先生なりに守ってこられたと思うんです。竹中先生を悪く言う人がいるんですが、先生がもし長生きしてくれていたら、わが国で第一番に同志社に社会福祉学部ができていたと思います。先生には政治性があった。だからこそ同志社に社会事業専攻を持ってきた。

室田 だからこそ、竹中先生の厚生事業の位置をはっきりしないと。
豊田 戦争協力はされたと思う。私の弟などの話を聞いても大阪の学徒動員の工場に来て激励されていたと。私でもその時代、二十代は戦争遂行に一生懸命になっていた。今は絶対反対ですよ。だけどその当時真っ向から戦争に反対するのは山宣とか小林多喜二とか徳田球一みたいに十六年も監獄に入れられている人ではないと。竹中先生にはそんな勇氣はなかったんでしょ。責められないと思うな。

社会福祉学、戦後の展開

井岡 戦後、一九四六年に文学部に社会

学科が設置される。英文学科と文化学科。社会福祉学専攻が設けられましたのは四八年。新制大学になって、社会学科の中で社会学専攻、新聞学専攻の三専攻ができた。その当時に着任されたのが竹中先生、嶋田先生、翌年、中条先生。小倉襄二先生が五〇年から着任。五〇年に日本で初めての大学院の修士課程を設置した。日本人の先生のほかに宣教師、メアリー・ウッド、ジーン・グラント先生、ほかに、エレナ・カスパーが二年ほど。

豊田 進駐軍の中佐だった。

井岡 その二年後にドロシー・デッソーさんが着任される。

豊田 ラーネット先生以下、伝統的に派遣宣教師がいた。この人たちの宣教師活動は今も続いています。今も社会学科におられるでしょう。

井岡 マーサ・メンセンディック先生。

豊田 その人たちが支えてくれていると思うな。よその大学にない制度だと思えます。ケリーさんのように、アーモスト大学の関係とかが続いているのは同志社の特色です。宣教師の先生方の感化が著しい。クリスチャンになれとおっしゃら

なかったのにチャペルに自然に足を運んだし、アッセンブリーアワーに足を運んだ。同志社的なアトモスフィアは伝わってる。だから悪いことはできません。

井岡 豊田先生らしい(笑)。

豊田 あれだけ軍隊で悪いことをした奴が、もう今はできん。悪いことをしたら良心の碑の前を通れない。

井岡 宣教師の教授の中でドロシー・デッソー先生の紹介をしていただけませんか。

豊田 僕が大学院の時はメアリー・ウッド先生、グループワークはジーン・グラント先生で、後にカスパー先生でした。僕らが大学院を修了した後、デッソー先生が来られた。ぼくが直接に習ったのは、ぼくが京都市役所でケースワーカーになってからです。広島における民生部のトップにあったデッソー先生がこちらに来て、軍政部を辞めて私塾として個人のマネーで開放してケースワーカーの訓練をなされた。関田町の武間富貴夫人の家の二階を借りて。最初、私、大塚など六人が毎金曜日に集まった。で、そのグループをフライデーグループと名付け

た。ケースワークの「いろは」の「い」から習い始めた。その時が最初です。夜中までやる。先生と膝突き合わせて。その後烏丸の私学会館の近くの佐伯産婦人科のお宅をデッソー先生が買われて、そこへ京都市のケースワーカーがみな行つた。全部先生の私費でした。勤務後、十一時位までやって、続けているうちにインフォーマルではいけないというので、京都市がスパーバイザーのフォーマルな形をお願いをした。同時に先生は同志社の講義も持つておられた。怒られたし、言い合いもした。アメリカ的な考えだ、

日本で通用するかと。先生も気が短い方だったから、先生にいろんなものをぶつけられた。しかしウッド先生に受けた手ほどきを、デッソー先生にはずいぶん深めていただいた。

井岡 デッソー先生は後に葵橋クリニックを作つて一九八〇年に亡くなられた。ケースワークの指導を通して日本に骨を埋められた。

豊田 その後、引き継がれたのがオーテイス・ケリー夫人です。デッソー先生と親友だったから。その後、葵橋ファミリ

ークリニックの所長は大塚達雄君がやっていた。今は住谷さんがやっている。**井岡** アリス・ケリーさんは大学院で社会医療論も担当されました。

豊田 ラーネットさん、デントンさんと並んで、お世話になったウッドさん、グランドさん、ドロシー・デッソーさんのご恩義は忘れられない。

井岡 一九五三年、竹中先生が参議院に立候補されて退職された。社会福祉学専攻にとつてもパニックだった。

豊田 止めたんですよ。

井岡 嶋田先生がシカゴ大学に留学中で、留学先から急遽呼び戻された。

室田 時代区分からすると二期。新島から明治期に出た人たちをキリスト教社会事業史で総括されました。同志社の社会事業の伝統を竹中先生の中で集約されて、戦後に延ばして引き継いでいかれようとしたと感じるんですね。せめて五、六年おられたら同志社のいい伝統ができたんじゃないかなと。

豊田 参議院なんか出なかつたらよかつた。

室田 竹中先生のものがうまく継承され

ておれば。嶋田先生なり……。

豊田 嶋田先生は人がいいからね。竹中先生のいいところを引き継いでいこうと、竹中先生に直言してほしかった。国会議員の柄じゃないと。大学に残れと。**井岡** 嶋田先生は泣いて止められたんですね。

豊田 和田洋一先生も止めた。

神学と社会福祉学の融合が必要

編集部 慈善事業から社会福祉、個人から組織ということですが、中村遙はどういうふうに評価されますか。

山下 中村遙先生は大阪水上隣保館ですね。僕の学生の頃は、神学部の卒業生は直接教会の牧会に従事するのが使命であつて、その他のことをしているのは脱落者であるという言い方をされたこともありました。中村先生が、どういう理由で社会福祉事業に参加されたかについてはよく知らないままに、教会関係で評価されたこともあつたでしょう。中村先生が牧師として神学部の卒業生として直面した現実の中で、自分が持つていた信仰と、

明治の初期のキリスト者と同じような必然性を持って参加されていた。

その視点からぜひとも、同志社でキリスト教社会福祉領域と教会との関係を再度フィードバックして研究しなおしていただきたい。僕自身の経験的な表現では、同じ兄弟でありながら冷たい関係の兄弟である。たとえば、石井十次の場合でもその他の場合でも、創設期で活動が小規模な時は教会の皆さんは支援しています。組織化されて主体的な活動を始める」と「もう我々は別のものなのだ」となっていて関係が冷たくなる。その連続、繰り返しで教会とキリスト教社会福祉の現場とがこれまで持っていた関係ではないかと。

豊田 中村先生を水上生活者の救済事業の対象に仕向けたのは賀川先生ですか。
井岡 そうです。一九三一年に開始されています。

豊田 中村先生にも親しくお目にかかりましたけどね、理屈を言う方ではなくて、牧師さんという感じがした。オイルショックの時に、先生は大風呂敷を担いで大山崎とか茨木の町を回った。トイレット

ペーパーを下さいと。誰一人として応じなかった。そんなことを園長自らやっておられた。

室田 中村遙のほかに石田英雄もいます。そして女学校も同志社の一つの系譜ですが、女性でまず思い浮かぶのが井深八重さん。明治三十年くらいのお生まれですか。

井岡 そうです。井深さんについては、「同志社時報」一〇一号に横須賀基督教化会館館長の阿部志郎先生が感動的な文章を書いておられます。ナイチンゲール賞を受賞された。看護に関連すれば大学広報に出ていました京都看病婦学校を出られた谷村さん。伝染病とか助産婦の役割を果たされた生まれながらの看護婦。

室田 同志社病院と京都看病婦学校が明治二十年にできた。この伝統が続いておれば、貧民の在宅看護を明治二十年代からやっていた。石井十次の次の夫人になるのが、たつ子という看病婦学校の卒業生です。この人脈はユニークな系譜です。新島が生きていた時代の新島精神の形ですね。

井岡 戦後、神学部卒業生の中で、社会

事業の実践でご存じの方は。

山下 大阪の四貫島でセツルメントとか老人ホームを運営されている小川居さん。賀川豊彦の流れを汲んでいる神戸のイエス団常務理事村山盛嗣さん。京都国際福祉センターの所久雄さん、それに福井達雨さん。

豊田 鳥取の母子寮の鎌谷幸一君。

山下 金井愛明先生もそうです、釜ヶ崎伝道の。戦後になると、僕たちが存じあげている人は多様な社会実践をした人たちです。

豊田 最初はね、教会の牧師で行ってるんです。鎌谷君の場合でもそうですけど。教会を転々としながら結局、郷里に戻って母子寮を作っている。

山下 今になって残念だと思うのは、僕たち自身も大学の頃に、歴史のある社会福祉学専攻がありながら接点がないまま卒業してしまっている。たまたま自分が赴任した教会、その地域の問題性と自分の信仰的姿勢の中で、社会福祉と接点のある具体的な活動が始まっている。その場合、専門的な技術とか方法論は現在では高度な訓練を必要とするものが求めら

れている、最初の段階から。その意味で、大学の中で学部を越えた必要なトレーニングができるようなものが考えられていないのではないかと。

室田 そういう意味では、昭和十六年に文学科に移って、分化されてきたわけです。社会福祉士受験資格の科目を神学部の人には取れないのですか。

井岡 単位は取れます。他専攻でも。

山下 学生が自分の意志で選択するかが問題ですね。同志社そのものが、今持っている歴史的な経緯の中で、教会の学であった神学と人間の学である社会福祉学が融合一体化している伝統がない。現実的な学校経営と言っているのかどうか、学生教育の中で合理的にアレンジされたものがあったもしいのではないかと強く感じますね。

豊田 私も社会福祉の実習生を各施設に出す。心に安らぎがある施設は宗教関係の施設に多い。確かに実感しますね。カソリック系の施設でもそうです。シスターがいたり、教会があつて礼拝をしている。心の安らぎがあります。鎌谷君がやっている鳥取の母子寮でも彼は教会を持

っていました、強制はしないんですが。宗教的な雰囲気と社会福祉は密接な関係がある。教会でなくお寺でもいい。

質だけではなく 量の問題にも目を

井岡 今後の同志社の社会福祉と未来ということで、課題をどう受け止めて展開していくか。その前に戦後から今日までの特徴的な社会福祉家として脇田悦三さん、脇田豊さんが白川学園、矢野隆文さんは糸賀先生を助けて実践で、そういう方々がいらつしやる。今日は組織化され制度化されて、明治の初期の華々しい活動の場というものがあつたわけではありませぬ。しかし、初期の同志社スピリットを受け継いで、地の塩としてがんばっている方はたくさんいらつしやる。

あと忘れてならないのは留学生ですね。神学部を出られた金徳俊先生が韓国の社会福祉学界で活躍されました。その後、金萬斗先生、大学院を出られて今、韓国の社会福祉教育のリーダーです。

編集部 女性では女専出身の金玉羅先生の社会福祉法人韓国自願奉任能力開発研

究会代表理事会長ほかのご活躍をあげなければならぬ。

室田 ハワイで伝道と教育や社会事業に尽した奥村多喜衛や曾我部四郎という人は移民の人たちに尽力していきます。海外で活躍されている方はたくさんおられます。中国での清水安三さんとか。

井岡 同志社の百年史を見たんですが、留学生としてまとまった項目で書いてあるのはないんです。今後、留学生の活躍をぜひ載せてほしい。

室田 十年ほど前、社会福祉士の資格制度ができて、共通のシラバスなり、各大学で共通のものを作らないといけない。独自のカリキュラム構成をどう作り上げていくか。平均的な人材がこれから出てくる。その中で同志社は伝統なり建学の精神から言えば、ユニークな人材を育てていけるところだと思います。そして多くのソーシヤルワーカーなり福祉士が出てくると思いますが、これから質が問われていく。同志社教育をユニークな形で展開する必要があると思う。

井岡 現状を紹介しますと、同志社社会福祉学会という学内学会を持っていま

す。我々教員と大学院生と卒業生、社会福祉の実践、研究者を合わせて四百名です。実践者も多いし研究者も多く、各大学に進出しています。

山下 高齢化社会になって社会福祉が地域、コミュニティベースになってくる。

市町村レベルになってくる。サービスのためのマンパワー、ケースマネージャーの問題とか老人福祉の関連では介護福祉士の領域が出てきます。介護福祉士の養成校を見ていると問題を感じます。ほとんどが各種学校。しかも経理専門学校だったところがコースを設けている。厚生省の認可を受けてしまえば、そこで養成された人が介護福祉士として福祉現場に参加していく。これまで一国の良心を育てるとい言い方で言われてきた同志社の人材養成は、一つの地域の良心になる人を育てるような、質だけの問題ではなく量的問題も考えていかなければならない時代になってきた。端的には、これだけ優秀な大学が社会福祉学専攻を持っていて、どうして介護福祉士の養成コースを設けないのか。仮に夜間でコースを作られたとしても校舎もあれば人材もあ

る。何の問題もない。二十一世紀の老人福祉のマンパワーを支える質と量を積極的な考えをお持ちいただけないかと思えますね。

井岡 介護福祉士のコースが持っていない。社会事業学専攻を出発して六十六年を越えるんですが、まだ専攻のままなんです。これを学科にし、独自の学部にするのは極めて難しいわけですが、ぜひ学科、学部にしたい。二十一世紀には。

山下 老人介護、高齢者介護のためにマンパワーは四年制大学を全部出していないといけないかという点も必ずしもそうではない。優れた歴史のある社会福祉学専攻のある同志社に、学部とはレベルは違う形態で、そのニーズに応えていただけるといふ必要性があるのではないかと。

井岡 社会福祉系大学で介護福祉士コースを設置しているところもふえてきています。同志社は早く出発したけれども、時代に追いついていない面がある。
室田 伝統がありすぎて新しい改革ができないという。

今後の課題

井岡 最後に、長い同志社の社会福祉の歴史、伝統があるわけですが、今後の課題、福祉にかかわる同志社人としての課題、我々に対する注文を含めて一言ずつ発言していただきたい。

山下 日本の社会福祉構造は完全にコミュニティベースになってきている。それに対応した教育機関、機能を持つてもらいたい。関係社会福祉施設は多様で専門的な知識を要求されている。何とか社会福祉施設の研究センターとして大学が機能していただけないか。さまざまなネットワーク、たとえばインターネットで援助を受けられる機能を現場から期待したい。

第二点。広がりを持つていただきたい。シームレス、ボーダレスにしていきたいと思います。必要に応じて施設職員などがフリースペースに参加できる、大学の専門的な援助を受けられるものは考えられないか。開かれた大学です。

第三点は、国際化。発展途上国、南ア

ジア、東南アジアの留学生は、これまで技術関係、政治・経済関係中心だった。これからは社会福祉領域でしょう。韓国でいい役割を果たされている卒業生があるということでしたが同志社の社会福祉学専攻は発展途上国に開かれていてほしい。バン格拉デシュとかスリランカ、ネパール、ブータン。今、日本に勉強にこられる人たちは明治時代の先達と同じです。その人たちが同志社に来て学んで帰ることによって、それらの国の社会福祉のレベルは我々が想像する以上にいい意味で改革されるでしょう。そういう意味では国際性を持って、ぜひ発展途上国の留学生を受け入れる大学であってほしい。

井岡 実際同志社を出て現場で実践していらっしゃる方々や先生ご自身も含めて、福祉にかかわる同志社人の役割はどういうふうにお考えですか。

山下 今までは組織構造的なものを申し上げましたが、人間のあり方で言うならば、一言で言うとうと、地域の良心になれるような意識が重要ではないか。高齢化に伴う社会福祉構造の変化に伴って、特に

老人福祉の中にケースマネージャー制度が導入されてきた時に、どんな人間観・価値観を持つてこれに参加するのか、地域で働くのが重要な要素になる。伝統的な言葉で言うなら地の塩であり、その地域の良心であり、その地域の一角を照らす人が同志社に関係した社会福祉領域でのワーカーであってほしい、我々もそうありたいと思います。

豊田 山下先生の最後の言葉を私も繰り返したいと思います。それが同志社の特質だと思えます。それが一つと、大きな望みは持ちませんが、地味でも、良心を手腕に運用するような人物で、下積みで決して底辺の人を忘れないような地の塩的な活動が良心的にできる人を一人でも二人でも増やして行ってほしい。

二番目に、二十一世紀には社会福祉学部をどうしても作ってほしい。よその学校は作っています。伝統のある同志社大学に社会福祉学部がないのは情けない。

山下 現代の七不思議だと(笑)。

豊田 社会福祉学会の会員が四百人くらい居る。各地に点在してそれぞれいい活躍をやっている。あれは強制的に教えら

たわけでもないけど、同志社に学んだというところで、教育界にしても行政にしても施設にしても活躍してくれている。これをもっと増やしていかないといいかん。

山下 僕も今、福祉の現場にいと、いつのまにか一つのメカニズムに組み込まれていく。福祉サービスですら制度、規則のメカニズムに入る。その中で、はみ出していかざるを得ない人たちがいる。

その人たちの痛みがわかるワーカーでありたいと思います。同志社が持っている明治の初期の先駆者たちの最初の出発点は、その立場にある人たちの痛みを自分の痛みとした時に、それに仕えていく働きが起こってきたのではないか。社会福祉制度が完備しサービスシステムが構造化してメカニズムが厳格になればなるほど、はみ出してしまい、その中で痛みを受ける人はいる。それがわかるワーカーがないと、メカニズムは冷酷かつ非人間的な機能と役割も果たすのではないかと現場にいて思っています。

豊田 おっしゃる通りです。その気持ちがあなかつたら現場は勤まらんといいかん。

室田 両先輩が言われたことに尽きるんですが。痛みがわかる人と、確か福井達雨さんが言っておられた。対象者のために祈るのはその人が楽になるものであって、対象者と共に祈る姿勢が大事である。祈る人が、その人のために祈るのではなく、共に祈ると祈る人が重くなる。その十字架を担いでいく。内村鑑三は、イエスを信じて、信じたことによつて自分の足をさらに深く掘ることができた。見えない部分が見えてきた。不可視の領域、見えない部分がかかるのが宗教だと思ひますが、そういうことが大事かなと思ひます。

もう一つ、本務校で生命倫理を担当していますが、「いのち」の全体を考えていく教育がこれからますます必要じゃないか。同志社らしい福祉は今では留岡とか山室を言つても効果がないかもしれませんが、同志社の伝統として隣人愛とかキリスト教的な倫理観、社会科学であり、社会への視点が思想の課題としてあるんですね。社会への視点、隣人愛、「いのち」、幅広い人格教育、人権教育がますます高齢社会、少子化社会にあたつて必要にな

つてくる。「いのち」を考える時、胎児からターミナルケアまで入れた教育をきちつとやつていかないといけない。それと批判精神です。

よく今、現代社会がめちやめちやになつて、第二の敗戦とか第三の開国と言われている。二十一世紀に向けて、同志社は倫理、哲学ができる可能性がある大学ではないかと思ひます。高橋元一郎という社会事業家であり詩人である人物が、徳富蘆花が死んだ時に「良心の阿蘇山」という言葉を使うんです。この言葉は私の好きな言葉です。先程、言われた地域における良心というような人材が出てくればなど、外から見ても思ひます。

豊田 社会福祉学部ができたなら社会事業史という科目も、同志社の留岡とか山室に始まる同志社の特色あるキリスト教的な社会福祉をぜひ学生に吹き込んでほしい。同志社人でないとわからんというものがあつてと思う。同志社人が果たしている役割はまことに大きいと思ひます。

井岡 先生方からいただいた言葉を胸に刻んで、学生にも伝えて、二十一世紀、同志社の良心を以つてどう生かしていく

かを考えていきたいと思ひます。どうもありがとうございました。

(一九九八年一月八日)

同志社大学 ハリス理化学館にて収録)